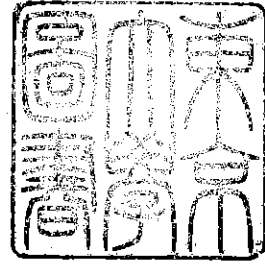


1988



砧をうつ女

人面の大岩

半子ヨッパリ

長寿島

奇蹟の日

水汲む幼児

解説 水上勉

五

四

八

七

一

八

三

H821253

張述伊ジャンスエリが没したのは、日本の長い戦争がもう十カ月もすると終りを告げる冬のある日のことだった。

その日のことを、僕は鮮明に憶えている。もう九ツになっていたからであろう。少年期におふくろと死に別れたことが、僕の性格形成に影響をあたえなかったとは思わないが、その時分はまだよほど無邪気な少年に過ぎなかった。

母はよく僕のことを「ジョジョ」と呼んで、ひやかしたものである。このあだ名はいまだに正確な語意がわからない。朝鮮語に発音別になおすと、「丕丕」か「丕丕」、あるいは「丕丕」。「丕丕」の四通りが考えられるが、辞典にその語意とおぼしいものはないのだった。母は慶尚道の出である。新羅時代の古都・慶州にほぼ近い農村で生れている。その地方特有の子供にたいする愛称かと思つて同じ道内の人に訊ねたこともあったが、ついにわからず仕舞であった。

だが、構わないのだ。どうせ、その意味は、「オッチョコチョイ」とか「おませ」「出来損い」といった部類のものなのだ。そうと類推しながらあえて人々に訊ねたのは人が悪いようだが、しかし、人々について訊ねてみたいほど、僕はこの呼び名にふかい愛着を覚えていたのだ。

母がいつから、蝟踊りのせいであろう。少年の僕は人を笑わせるのが得意で、しばしば大人達からだが恐らく、蝟踊りのせいであろう。少年の僕は人を笑わせるのが得意で、しばしば大人達から拍手喝采をうけたものである。あの蝟踊りは思い出してみると、阿波踊りよりはタイ国の王宮舞に似ている。手首をピクリピクリ動かし首もすくめたり出したり見たり。そのリズムミカルな調子が芸の冴えを見せるのは飛んだりはねたりする時だった。人々はその姿からその昔、新羅の花郎(貴族階級の若武者)がめざましく舞った剣の舞を思い出して、うっとりしながら「その調子だ」とおもわず声をあげるのだった。つい僕は浮かれてテンポを狂わすのでとたんに人々の評価は落ちてしまう。どうやらそれは猿がノミをほじくりながら動き回っている図に見えるのだ。かくして、僕の踊りは「蝟踊り」といったさほど名譽とも思えぬ呼び方で人に知られることになったのだ。

「アイゴ、うちのジョジョや。ジョジョ……」

母はおかしそうに笑っては溜息をつく。

「……どうしてお前は、ジョジョなんだい」

言われると、僕はなんだか賞められた気になり、一層踊り出したくなる。父と母が喧嘩してい

るとき、僕はこの蝟踊りによっていざかいを中止させてしまったこともあった。どうも気合が入らないといった表情で父は早々に喧嘩を切り上げてしまったのである。

ジョジョも大したものだ。だがその僕にもじつは弱いことがあった。どうしたものか、夜尿症のクセがあったのだ。ことに冬は鬼門であった。朝になってから僕はよく夢に欺されたのを悔やんだ。たしかに今度こそはと思ったのだ。ちゃんと寝床から起き上って便所に行き、安心して放ったのである。その直後、アッと思うがもう後の祭だった。切ない気持で敷布を軀で温める。鶏がときをつくっていた時間がとくに過ぎて、もう起きる時刻は近づいてきている。それなのに敷布はなかなか乾いてくれないのだ。

「……起きなさい。それから伯母さんの家に行って塩を貰ってきてよ」

台所から母は僕に声をかけた。僕は首をすくめた。蒲団に濡らした朝はきまっぺこう言うのだ。疑ぐりぶかい眼付で母の顔を見た。そ知らぬ顔をしているが怪しいものだ。これは、お遣いではない。塩を貰いにいったが最後、伯母の手で尻が剥けるほど叩かれるってことくらいこっちはとうに知っているのだ。

はじめの内は、そうと知らずに、出かけていった。寝小便をたれた手前、これくらいの手伝いは安いものだったから。母はドンブリを手渡して、どっさり貰ってきな、と言った。

「どっさり、くれてか。ああ、いいとも」

背の低い伯母は僕を手招きした。ドンブリを手渡そうとすると、伯母は手首をしっかり握る

のだ。どつきりな。ほうら、やるさ。これじゃ、足んねえだべ、もつとやろうか。まだ足んねえだべ——。伯母の手は僕の尻をぶっつけていた。その痛さったら。僕はドンブリをかの女に投げつけ、泣きながら逃げ帰った。母は胸に突進してくる子供を見て、笑うのだった。

「どうだ、塩は貰ってきたか。おや、なんで貰ってこなかったんだい」  
 そのとぼけた口ぶりが僕には肚立たしい。なぐりかかる子供を抑えながら母はまだ笑っているのだった。そして、寝小便をする子は朝鮮のしきたり通り、塩を貰いに行かされるのだとおしえるのである。

「いつになったら、よその子のように。ほんとに六ツにもなって——」

母はそう言っていて、僕に注意させるのだった。しかし、母は毎年同じセリフを子供にきかせる羽目になった。年毎に子供の年齢を変えていきながら、六ツにもなって、は七ツにもなってという具合に。その僕は九ツにもなって稀に伯母の家からスッ飛んで帰ってくるのがあったのである。伯母の家にいけば、ぶたれるのはわかっているのだ。九ツにもなると、そんな智恵だけは働いていたが、どうしたものか、そのつど出かけていくことになるのだった。母の暗示にかかってしまうせいでどうするか。母の言葉はいつ聞いても何かいいことがありそうな期待を惹き起すのであった。抗いがたい不思議な魅力を感じさせるのである。まったく、とんだ災難だ！

僕が照れくさそうに家に帰ってくると、母はつい溜息をつくのだった。  
 「アイゴオ、いつになったら直るの。うちのジョジョや……」

その日の朝、僕は伯母に叩き起された。いかつい伯母の顔を間近に見ると、僕はすばやく敷布に手をあてて見た。大丈夫だ、濡っていないかった。僕はホッとしてかの女の顔を見つめた。それなのに、なぜこの僕をぶちたそうにしているのだろうか。わざわざ家にまでやってきて——。

「何をホサホサしてんだよ、ふんとに。いまだんな時だと思ってるんだい」

伯母は邪険にわめいて、尻をこづいた。僕はあわてて寝床から飛びしきった。六畳のその部屋には何人もの親戚が集まっていた。アバタ面の伯父は腹巻に手を突っこんで立っていたし、遠い親戚まで一人二人。どの顔も浮かぬ面持で奥の部屋をそつと眺めていた。うめき声と励ます声がまじってきこえてくる。僕は、赤ちゃんが生まれるのだろうかと思つた。母は大きなおなかをしていたし、聞き覚えのある産婆さんの声がきこえてくるからだ。しかし、大人達はなぜか浮かぬ顔だ。奥の間の透かしガラス戸のそばで兄達が坐っていたが、やはり落着かぬ眼付をしていた。

僕ら兄弟はその日、早目に学校へやられた。まだ学校にいていない下の妹達は家に残った。耳が凍りつきそうな朝だった。朝陽が透明な寒気を縫って雪の色を紅く染め出していたが、吐く息は真白だった。僕ら三人は、とある坂道で二手に分れた。中学生の兄は右手の坂を、六年生の兄と三年生の僕は左手の坂をのぼっていった。校舎に入ると、僕らはいちばん乗りだった。教室は冷え切っていてじっとしていると手足が痛かった。猫背の小使いさんがストーブに火を入れに廻ってきて、びっくりしたように僕を眺めたのを憶えている。

二時間目は国語の授業だった。ストーブは音をたてて燃えさかり、木つつきのようなチョーク

の首と鉛筆の芯をいつまでもけずる音、それにまじって弁当の匂いがうっすらと教室を包んでいた。もうすぐ、お昼だ。弁当を持たずにきたのがぼんやり気になり出してた。伯母は弁当も持たせず、両手を振って学校へせき立てたのだ。アア、弁当ヌキカ。僕は窓を眺めながら情ない気がした。校庭の一角に銅像の台が見えた。柴を背負って本を読んでいた二宮尊徳は戦場に出かけていった。衛生時間も戦争のあおりがきていた。この時間には女の先生が注入器で生徒の口に肝油を差し入れてくれる。ぬるっとした肝油は生臭いが、いそいで僕は配られた三粒のラッカを口にほうり込んでやる。しかし最近はそのラッカの配給がなくなり、肝油注入だけになってた。木をついばむ音が跡絶え、ドンという音がした。先生が教壇を降りて、戸口の方に近づいていくところだった。どきりとした。何となく、自分のことのような気がしたのだ。予感も当たった。間もなく、先生は深く頷いて、僕の方を見返り、名前を呼んだ。直ぐに病院へ行くように言うのである。僕はなぜか晴れがましい気持ちになった。「病院」ときいて、級友達が一瞬うらやましそうな表情を浮べたからである。無理もない。僕はそこをいちど入院してみたい年頃だったのだ。「病院」ときくと、僕はそれだけで感傷的になった。殊勝そうに席を離れた僕は、みんなのうらやましそうな視線を背後に感じながら、廊下に出ていった。

六年生の兄が思いつめた顔で立っていた。  
「すぐ病院さ来いってよ。わかるべ」

兄は僕の上気した顔を見て、咎めるように言った。それから問答無用の態度で、長い廊下を滑

り出していった。校舎を出ると、雪の紫外線が眩しかった。兄は僕をせき立てて走ったが、やがて舌打ちを一つ残し、振り切っていった。M斤立病院までの長い雪道はよく滑った。人馬が踏み固めた道はワックスがかかったように光り、足を取るのだ。なんども転んでやっと病院にたどり着いた僕は、いたずらに病棟の廊下をうろうろした。母の病室がどこにあるのか見当がつかなかったからだった。廊下は奥に迷いこむほど陰気な気がした。渡り切ると戸の外に墓がいっぱい立っていきな不安が胸をしめつけてくるのだった。だから、どうにか母の室を探し当てた時は、うれしきで声をあげてしまっただけだった。

だが僕は半びらきのドアから軀をすり込ませると、壁に背中をびたりつけたまま身動きしなくなつた。先に到着した兄がこぶしを両眼にあてていた。中学生の兄は天井を睨みつけていて、父は凍水をすすりながらその兄に何やら話しかけている。その光景はまだ僕に母の死をはっきりと感じさせなかった。これまでになく親密に親が子に語りかけ、大きな心配事がかかえて相談し合っているように見えた。ベッドの母は父親とわが子の語らいを耳にしながら安心して眠っているようにうつる。これで息子達を父親にかえしてあげたと思っただけなのに。僕は家庭の中で、いつも母最負だった。それには理由があったが、子供の眼に母は弱者として感じられていたのである。

父はやっと僕に気づいて、温った声で呼んだ。何と呼んだのだろう。その言葉には四十歳で妻を失った男の感傷と五児の親の気丈さが縋り合っていたはずだった。ふと僕はそこに父の憎

しみさえかすかに感じ取った。母親が死んだのに泣きもせず、いつまでも壁に貼りついている三男を見て父は一瞬容赦できぬような表情を浮べたのである。幼少の時分から父は時たまそんな眼の色を浮べた。夜中に目が醒めると、僕は枕をかかえて父母の部屋に入ってしまった。母はどんな時でも寝床に入れてくれたが、父は苦笑するか、いまいましそうに追い払おうとした。母の軀のどこかに自分の軀を触れていると安心して眠れるのである。僕の足のかかどが母の下腹の固い部分に乱暴にのせられていることもあった。おかしな子だよ、と母はそっと足を外し、僕を抱きすくめるが、父はあつちへ戻せと言うのだった。

父に呼ばれると、僕はビクリとふるえ、ドアの隙間から廊下へ逃げ出したいほどの恐怖を覚えた。母のお供をさせて、一緒に死なそうと父が考えているような気がしたのである。おまえは「ジョジョ」と呼ばれて特別可愛がって貰ったのだから、母さんと一緒にあの世に行つてやれ……。妄想が惹き起したこの架空の聲はほんとうに父の口から発せられたように迫ってきたのだ。僕は肩で息をしながら壁から動けずじまつた。懇願するように父を見つめながら。そんな子供の眼差を父はかなしみのせいなのだど勘違いをしたのであろう。かれは子供の手をとって母親のかたわらに連れていった。

「もう可愛がって貰いたくてもできないんだ。もう……」

父は涙声でしゃくりあげた。そして僕らに母親の最期を説明するのだった。それによれば、「自分の手を握って」子供のこぼかり心配していたというのである。「どうなるの。私に死んだら、子供達はどうなるの」と諭言のようにそればかりくりかえしていたというのである。

病院にかつぎこまれると、母はすぐに帝王切開をうけた。昨夜からの出血がはげしくて自力で分娩することができなかったからだ。胎児はまるまると肥えていたが、取り上げられるとすぐに死んだ。母親はそれからじよじよに血の気がうせていき、児のあとを追いかけていった。

母のかたわらに産着にくるまれた赤ん坊が置かれていた。その子は本来なら僕らの六番目として祝福されるはずであった。しかし僕達はそのとき母の死にすっかり心を奪われていて、六番目の不運にはまるで気づかずにいるみたいであった。

葬式の間じゅう、僕は陽気に振舞っていたものだ。

考えてみると、葬式は子供にとっては祭とたいしてかわらない。病院で流した僕の涙はもうすっかり乾いてしまっていたし、どうしても祖父母のようにいつまでも歎くわけにはいかなかったのだ。それにどうしたものか、母が永遠に死んでしまったという気が起らないのだった。棺を見ると、確実に母は別世界の人だった。けれど家に集まってくる人々を見ると、なにか祭がはじまるようにうつり、どの人々も母を讃えにやってきたみたいで僕はだんだん気が浮かれていくのだった。

この夜ばかりは燈火管制も大目にみられた。わが家だけの特権に見えるのだ。明りは雪を照らし、そこそこに立てられている花輪や喪章のついた協和会（日帝時代、「内鮮融和」のためにつくられ

た組織の旗を浮き出させていた。僕は得意であった。多くの花輪や旗を見て近所の子供達がすっかり萎縮していたからだ。いつもは威張っている子も今日は一目置くようなそぶりを見せるのだ。大人でさえ僕に敬意を払っているように思われた。なんとなく祭の稚児さんになった気持になった。母をまつる祭なのだ。僕は人々の注意を惹きつけるため、しおらしく雪壇に焼香をしてみせたり、生あくびを嚙んでそうっと涙ぐんでみせた。

そんな孫のようすを眺めて、祖母は膝を叩いて歎くのであった。  
「アイゴ、ジョジョや。ふんとなにも知らねえでえ」

中学生になってつくった詩に「追憶」というのがある。下手な詩だが、僕にはなつかしいものである。

少年が泣いている。少年のみなしきは天に届き、あわれみの涙をこぼす。氷雨が降っている日、少年は母の骨壺を胸にかけて火葬場から出てくる。コトコトと母の音がする——そんな内容のたわいな詩であった。

この詩は、いくらか事実と喰い違っている。少年は一篇の詩をつくるのにキュウキュウとして、事実を都合よくつくり変えてしまっているのだ。

母を野辺送りした日は氷雨でなく、吹雪が舞っていた。樺太の冬は気候が変りやすい。海鳴りがきこえてくる浜辺のわが家から雪櫃で出発した時はまずまずの日和だった。町をぬける頃にな

って雪がちらちら降ってきたが、すぐに陽が幌に差しこんできた。馭者がばんばに鞭をくれていて。鈴の音が高まる。僕は上機嫌だった。生まれてはじめて幌馬車にのって雪原をいくのだから幌の中は窮屈だが、ちっとも気にならない。火葬場までは一里余りだった。それはなだらかな山裾の丘をのぼりつめた所であって、雪櫃はあえぎながらのぼっていくのである。幌の窓から後をのぞくと、はるか後方におぼれ谷からせり出した海が広がって流氷が浮んでいる。目を前に転じると、だけかんばや白樺の林が迫ってくる。養狐場を過ぎると、火葬場の煙突が見え出すのだった。もうひとふんばりだ。僕は隣の祖母にそのむねを告げる。祖母はまったく不機嫌だった。彼女はウウと押し殺した声でうなずき、すぐに沈黙におちいるのだった。

とつぜん雪原がさつと灰色にかわり、幌の隙間から雪が吹きこんだ。雪嵐が起ったのだ。伯母がみんなの膝にいそいで毛布をかける。祖父は杖に手をのせて目を閉じたまま、何も気づかぬ風だ。幌が裂けそうに鳴り、鞭を鳴らす音が風にちぎれていく。ばんばが甲高いななななで前肢をむなしく蹴立てる。まがまがしい雪嵐はつるばかりだ。それは人々の胸に不吉な想いをかき立て、幸せだった昔を思い出させる。と、それまで不機嫌だった祖母が毛布をはねのけて叫び出すのだった。

「おお、うちの述伊がいやじゃと泣いているんじや。あれはうちの娘の叫び声じゃぞ」

伯母が腕を押えて、なぐさめにかかる。

「なんの。ただの吹雪じゃが。落着きなさいまし。述伊はもう召されましただ」

「述伊が、述伊が……」

伯母は溜息をついて、言いよかせる。

「みんなバルチャ（八字―因果の意）だべ。みんな、いつかは魂だけになってしまふだべよ」

僕は大人達の切なげな話に耳をすます。バルチャという言葉が珍しくきこえる。バルチャか。そいつの言葉で母ちゃんは吹雪のなかをさまよっているのだろうか。魂の行手が気になり出し、なんとなく僕も胸騒ぎを覚えるのだ。

夕方になって、雪風は凪いだ。火葬場から引き返す時、僕は一番目の兄からちょっと骨壺を借りうけてみた。首にかけると、骨壺はかいろのように温かかった。この中に魂が残っているのだろうか。しかし、軽すぎて、やはりどこかへさまよっていったようであった。骨壺の軽さが、ふうつと自分だけの存在を感じさせた。僕はうろたえて遺骨のつつみを一番目の兄にもどしてしまった。とはいえ、僕は母が死んでこたえていたわけではなかった。周囲がにわかに関心になったので、むしろ驚かされたくらいである。じっさい、親戚達の親切さたら。伯母など、以前なら僕さえ見れば、尻をぶちたそうに身構えたものであった。そうだ。いちどなど、僕の唐辛子をハサミで切るといつつまんだことさえあった。一生、つかえないようにしてやる、と僕を脅かしながらそれがどうだ。今じゃ、すっかり別人だ。僕が遊びにいくと、こちらをしんみり眺めて溜息さえつくのだった。

「どうだ。メシたべたか？」

「ああ、くつてきたよ」

「何だったら、たべなよ」

僕は驚いてかの女を見直した。伯母は大変なしまり屋だからだ。有名なカッジョニイ（しまり屋）だ。赤ン坊を生むのに産婆に金を出すのが惜しくて、自分ひとりですんでしまうのだ。僕はこの伯母がメシをたべるとすすめても、めったに箸を取らなかつた。かの女が糞壺の中に赤ン坊を生み落してしまったことを知っていたからだ。その児が僕より一ツ年上のスンテだった。糞まみれのスンテを拾い上げ、ヘソの緒を噛み切った伯母はその手でいつも御飯を炊くわけだ。僕が「腹いっぱいさ」と大抵遠慮するわけだった。しかし、気分はよかつた。塩を貰いにいった時はぶつだけぶつて一握りもよこさなかつた彼女が、こうも気前よくなつたのだから。

伯母に毒気がなくなつたように、他の女達もいつになく優しくなつていた。かの女達はわが家に来て、洗濯をしたり、食事の準備までした。父は不機嫌にその動作を無視している。かの女達はわが家に舞いもどると、あれこれ気ままな噂をするが、その辺は子供のあずかり知らぬ所だ。時たま、かの女達は自分の家でメシをくわせながら、うるさく聞くのだった。

「どうだ、それから？」

「淋しいかどう。僕は意味が掴めずに問い返す。」

「淋しいかどう。僕は意味が掴めずに問い返す。」

かの女達は、きまつた答を僕から引き出したがっているようだった。それはわずらわしい質問



であった。それにその質問の底には女の意地悪さがうっすら感じられたのだ。「ちっともさ」僕のそつ気ない返事はかの女達を失望させてしまう。かの女達はお替りをよそってやるのが惜しうな表情になっていくのだった。そこで僕は考え直して答える。「ちっとはね」

こうして暫くはとにかくもみんなが親切だった。だが葬式のほどぼりがさめてくると、女達は大んだんつれない本性を見せつけたものだ。伯母の唇に毒気がにじんできたし、僕を見るときにも尻を打ちたそうだった。ほかの女達はうす汚ない乞食の児でも眺める暇付だ。僕は身をひるがえした。畜生ッ、なんて薄情なやつらだ。この言葉は父のセリフだった。父は女達がやってきた時も、こなくなつてからも不機嫌であった。

薄情になつた女達のようなすは僕の気分を損ねたが、こうも考えさせられる時があるのだった。きつとこれはバルチャのせいなのだ。人間はバルチャのためにいつかは魂にされてしまう。それならせめて、生きている間でも自分のバルチャを大切にしようとしているのだから……。

わが家はしだいに男臭くなつていった。そして部屋の中から母の匂いが一日と薄れていき、それにつれて暗さが湧いてくるようだった。母との儀式を僕はぼんやり思い出すことがあった。たとえば、虫歯がぬけるとき、母は僕にこう言う。「屋根の上だよ、それは」上の歯がとれた時だった。下の歯なら、「床の下だよ」と指図する。もちろん、僕は忠実に言われた通りに捨てにいった。まぢがえると、鬼歯が出るからだ。そして、母の言う通りにすると、もう虫歯にはならないという気がしてくるのであった。

父は怒りっぽくなつていった。毎朝、父は脚にゲートルを巻き、高丈(たかたけ)（地下足袋）をはいてどこかへ出ていった。徴用で出かけていくのだ。夕方、もどつてくると、飯を炊き、洗濯をする。部屋の中は放つたらかした。父は妹を抱いて濁酒を呑み、ひとしきり親戚をくさして眠りにつく。母との対話を僕はぼんやり思い出すことがあった。たとえば、ある日の夕方、昼寝から目醒めた僕はあわててカバンを背負つて学校へ出かけようとしたことがあった。母はそ知らぬ顔で、いそがないと遅れるよとせかす。弁当つつんで僕はせかす。家族はみんな僕を笑つたものだ。

僕は祖父母の家に出かけた。その家に行くのは本当は苦手であった。なぜなら、母の親にあたるこの二人にはどことなく母の匂いを感じさせるものがあったから。それでいて、二人は母とは違ふのだ。いけば気話りな気がするの、そのせいだ、また妙にかなしい気分にもなるのだ。

その家は子供達から「洞窟」と呼ばれていた。物置から入る奇妙なつくりの家で、木扉の前に立つと、「開け、ゴマ」と唱えてみたくなるような誘惑にさそいこむのだ。木扉をあけると、薄暗がりになり、大小の甕が目についた。それはキムチを漬けた甕でつよい匂いを放つていた。手さぐりで潜り戸を探し、そこをくぐり抜けていくと洞窟の奥からよわい光が差しこみ、上り框の向うに石仏みたいに坐っている祖父の姿がぼろりと見えるのだった。

祖父は孫が訪ねてきても、めつたに感情をあらわさなかつた。煙のでない長いキセルを唇にくわえてじいっと坐っているのである。かたわらに和綴じの漢書が重ねられていて、古びた木枕を

置いてあるのがいつも目につくのだ。そばに坐っても何刻でも口を利かなかつた。しびれを切らした僕は祖父の膝元にそこらの物をボンと転がしてやる。その時になって祖父はこちらを振り向き、絞ったような顎をわずかに動かすのだった。その言葉はごく淡泊で、「外は雪が降っているか」といった風のものだ。そんなとき僕はこの祖父の気持を誰よりものみこめるのだった。そう、祖父は一人娘に先立たれて深い傷を負っているのだ。孫に話しかける時、祖父の乾いた唇はかすかに震えているのだった。

寡黙な祖父にくらべると、祖母はまるで大袈裟に感情をあらわす。僕はいつもかの女には僻易させられるのだった。洞窟に入っていくと、「誰じゃ！」と咎め、台所から突った眼付でこっちを見つめる。もし気に喰わぬ相手ならバガジ(瓢)で水をおちまけるのだ。孫だとわかるとフツクサ吹いてまた水汲みなどをはじめた。だが、暫くすると、かの女は僕のそばに片膝を立てて踵まわり、熱い息を吹きかけるのだった。

「天道様は間違っているだ。こんな餓鬼からうちの述伊を取り上げなざるなんて」

祖母がそばに寄ると、コウジ臭いので僕はなんとか離れようとする。髪の毛はくもの巢のようだし、皺だらけのサラサラした顔だ。だがもうお仕舞だ。かの女は意外な力で僕を抱きしめてしまふ、私の孫やと頬ずりをする。やっとの思いで抱擁を解いた僕は「くそ婆ア」と叫んで飛びしる。祖母は罰当りめがと負けず言い返すが、そのかたわらからもろくも涙声になるのだった。祖母は嘆き女のように娘の追憶に耽り出す。誰にくどくともなくわが娘の生い立ちを語りはじめ

る。いとしいわが娘の一生を泣きの涙で、身を顛わして膝をうちつけながら……。

それが俗にいう、身勢打鈴(身の上話。節をつけて語る)であるとは後で知ったことである。僕は今でもその韻律を口ずさむことができる。なんとも哀しい鎮魂歌だ。草笛が流れていくような淋しさだ。しかし、それでいて韻律には大河の流れのような格調、黄楊がなびくような優しさが、叩きつけてくる怒りや怨念と混って、どんな名手の楽譜にもない調べを紡ぎ出しているのだった。

耳を澄ませば、身勢打鈴が甦ってくるようだ。娘時代の述伊を語るあのほこらしげな口ぶりまでもが。

「勝気な娘じゃった。おお、そうじゃったとも……」

祖母は死んだ娘の魂に語りかけるように声をこらす。祖父は老妻の独り言を聞くでもなく、いつの間にか長キセルを置いて木彫りのビロ(笛)をこしらえている。僕は帰りそびれて、二人を奇妙な眼差で眺め出すのだった。

「……あの娘には誰もかてなかつたよ。そうじゃ、板跳びをするときは裳にいっぱい風をはらませて、どの娘よりも高く、きれいに跳んだものよ。空はあの娘がいとしく抱きしめなかなか離さなんだ。なら鞆(フランク)はどうか。綱にしっかり手をかけて、楊柳の枝より高く舞い上り、降りてくる。そりゃ燕のようじゃった。私はハラハラするが、あの娘は気にも留めな

いで……」

「……おませな娘じゃったよ。春になると、花びらでそっと爪を染めてみたり、私に髪を結わせてテンギ(髪飾りの紐)の長さがどうのこうのと……。そりゃほれほれする肌じゃった。そうとも、端午の日には菖蒲湯でからだを清め、毎年けがれなく育てた述伊じゃ。親の私がほれほれしたんじゃ、どうして邑の総角が黙っているのか。どいつもこいつも……。アイゴ、総角どもは野良仕事に手がつかぬ仕末じゃった。峠道で出会おうものなら、みんなはおずおずして何も言えなんだ。黄牛を止めて、ほんやりと見送り、あとはもう溜息ばかり。そうとも、はるばるソウルからも両班(貴族)があれをくれと言ってきたものじゃ。妾にしたいとな。アイゴッ、とんでもない。なんだって私の娘がそんな穢い女に……。ふんとに鬼神に啣えられてしまう野郎めが……。私や娘をいい人に、金はなくともしっかりと飼った総角にと……。それなのにあの娘は……」

とつぜん祖母の声はひきつり、乱れはじめるのだった。

「バルチャなものか。こうなったのも、因が亡びたせいじゃ。アイゴオ、鬼神に見込まれたんだよ、何で盗つ人の国へ行く気になったんだか。因を奪われた上に娘まで攫われ……。いっそのこと火田民になった方が増しじゃったのに！ アイゴオ、私のバルチャや、述伊や……」

はげしく祖母は軀を揉み出す。あられもない取り乱し方だ。祖父は黙りこくってビリをこしらえている。僕はこの老婆をいささか持て余し気味で眺めている。

娘時代から母は気性の勝った女だったという。没落した家の一人娘なら、両親はやがてしっかりした総角を婿に取って貧しくとも平和な生活を考えたのは自然であつたらう。だが、張述伊はもつと奔放な女だった。砧をうつて一生を過ごす邑の娘達のようにはなりたくなかった。祖母のくどくどしい語りを聞いている裡に、少年の僕の頭にはなぜか薄暗い壮版(油紙などを敷いた朝鮮の部屋)と粗末なカンテラが思い浮んでくるのだった。そこに三人の親子が坐りこんで夜つびて話しこんでいる。娘はしきりに両親を説得し、なだめている。大丈夫よ、そんなに心配しなくても。娘は肩にかかった長い髪をなんども動かしながら自信ありそうに喋っている。そう言ってもお前はまた十八歳だよ。そんなこと、もう大人よ、私は……。日本は景気がいいの知らないの……。どんなもんだか……。なんでも掻き立てていたカンテラの芯が消えかける頃、ついに娘は両親をあきらめさせる。

からりと晴れた澄んだ日だ。遠くの丘陵は紫がかかっていて、ポプラの木がねむそうに川べりに並んでいる。邑はずれの道には牛の糞が乾きかけてころがっている。日差しを溶かしている川はびちびちと躍って流れていて、どこからか砧をうつ音が聞えてくる日のことだ。

荷物を頭にのせた娘がその川に差しかかった。娘は二つにすっきり分けた艶のある髪を肩まで垂らし、テンギできりつと結んでいた。川べりで娘は素足になり、脱いだ沓を頭の荷物にのせると、浅瀬をさぐっていった。裳を濡らすまいと前髪をからげながら、ふと川べりを振りかえつた。両親がそこでの女を見守っていた。娘は首をこっくりと下げてみせ、ひそかに目頭を押えると、

髪をひと振りし浅瀬を涉<sup>わた</sup>っていった。

母はその時、三年後には郷里にもどってくる約束をしていた。祖父母は日本へ出稼<sup>いせ</sup>ぎに、娘にその期日まではかならず帰ってくるように言い付けたのである。しかし、娘は三年過ぎても郷里にもどらなかつた。その頃、両親に届いた手紙では同じ炭鉱で知り合った男の人と北海道へいくと書いてあつたそうである。故国へ戻るどころか、日本の北方に出かけるというのだ。両親はその「北海道」とやらが、どこにあるのか見当がつかなかつた。「北方」ということだけで、ただ気が遠くなつたのだ。

「……どの馬の骨とも知らぬ男をいっばしに啣<sup>くは</sup>えこんで……」

祖母はそういう言葉で娘の北海道行をののしつた。ところが、また何年か経ってやってきた手紙によると、日本の最北端へ出かけるというのだ。両親はその「樺太」とやらが、どこにあるのか、想像もつかなかつた。

「最北端」ときいて、目の前が真暗になつただけだ。

「男に欺<sup>あざわ</sup>された。そうに違いねえ。てつきり、そう思つたんじゃよ……」

祖母の心配は、逆に娘を故国に戻さぬ男への憎しみとなつて注がれるのだった。その男が、娘の帰るのを妨害しているものと思ひこむのである。

母がはじめて里帰りしたのは一九三九年のことである。テンギを髪に結えていた娘はその時も三児の母親となつていた。三人目の子供は数えて六ツになつていた。その児をつれて母はほと

んど十年ぶりで故郷へもどつたのである。

僕にはその時の記憶がほとんど残っていない。樺太の町を發つた夕方の光景と邑でのいくつかの断片的な思い出が僅かにあるだけであつた。家族の者や近所の人々に送られて駅に向つていく時、通りすがつた自転車の男が見送りの近所の子の足を轢<sup>ひ</sup>いた。その男は、そのまま通り過ぎようとした。すると母がひどく怒つて、男をあやまらせたのを憶えている。不吉だ、というのであつた。これから旅に立つのにそんな事を起されては、と気色ばんだのである。

故意でしたことでもないのに、なぜそんなに怒つたのか、僕は子供心にも不思議だつた。いつもの母からは感じられない態度だつたのだ。

道中のことはまるで憶えていない。そしてつとぜん、視界がひらけて、僕の前にはひろい川が映っているのだった。僕はくたびれきつていた。その川に差しかかると、母はしばらく橋のふもとで立ちどまつた。僕に何か話してくれた。昔、この川を素足で涉つていった娘の話をしたのであろうか。川はゆつくりと流れていたが、たえず光の粒を湧きかえらせていた。碇をうつ女達の白い着物を見たように思う。家で洗濯をすると、母はその乾いた着物を重ねてトントンと碇でたたいたものである。僕はそのことを思い出して、似ているね、と母に言つたかもしれない。しかし、そんな「ジョジョ」ぶりを発揮するほど協力的ではなかつたような気もする。長旅の疲れで、ずいぶんと母をてこずらせたはずだつた。

「もうすぐだよ。ほら、この川を渡れば、もうお終いだから」

母はぐずる僕をだましましたし、邑はずれまでやってきたのだった。なんだか、腹を立てて尻を  
 抓つかったり、よっぽど家に置いてくるんだったとおどかしたりしながら。

身勢打鈴によると、母は日本の着物を着てその上バラソルをきしてあらわれたそうである。そ  
 の恰好は祖母を驚かせた。見知らぬ日本の女が漬垂ひたなれの手を引いて、土間に近づいてきたのだか  
 ら。しかしその女は眼に涙を浮べて「母さん」と老母に駆け寄っていた。

張述伊は初秋の里で一ト月ばかりいた。

両親は娘の話をきくの何日もカンテラの燈心をかき立てた。十年の歳月はたっぷり時間を  
 必要とさせるのだ。かの女は壮版シヤンパンにころがって眠っている三番目の頭をなげながら、十年の歳月  
 を語った。それは何日かでは語り尽せない。朝早く黄牛を引いて刈入れに出かけていった父は昼  
 食にもどってくると、長キセルにきざみを詰めながら話の続きをもとめることがあった。

「で、関東大震災の時は大丈夫だったのか？」

「あの時はまだ故郷こきョウにいたじゃないの、そのあと少しして日本にわたったんだわ」

「そうだったか、時は過客だ。歳月がたったので、分らなくなるのオ……わたし達はいつの間にか  
 お前がその時殺されたのではないかと諦めていたのだ。あまり手紙をよこさないからだ」

「子供が生れたり、病気になるでしょう。父さんのことはずうっと想っていたのよ」

述伊は溜息まじりに答えた。老父は十年前より、見るからに老けこんでいたのだ。

「それよりか、こっちの暮しはどうなの。よく米が穫とれたようだけど」

「だめじゃ」

老父はキセルの雁首を土間の縁にテンテンと打ちつけ、言下にいい放った。

「倭奴ワカが邑の川に橋をつくったんじや。米カマスを自動車で運び出せるようにじゃ」

温突ユツクの焚口で柴をくべていた老母がにくさげに声をはさんだ。

「いっそのこと、樺太に行かない。あっちの方が住み易いわ」

「アイゴ、なんで今更。それより、おまえもそろそろ故國で暮す気を起すんじや。倭奴の着物な  
 んか着て戻らんぞ」

老母はプリプリして柴を焚口に折っては突っこんだ。

ある日、老母がみえない時を見計って述伊は父親に話しかけた。

「父さん。なぜ私があの時日本に去ったのか、父さんはわかってくれますでしょう……」

老父は黙りこくって答えなかった。娘はほつれ毛を掻き上げてつぶけた。

「あの時、実の母さんが又あらわれなかったら……私はなにもへ出稼でせぎになんぞ行きたくな  
 かったのよ。家にいると、私の取り合いになるでしょう。そして実の母さんはいつかのように追  
 私わたしわれるに違いなかったんだから……」

述伊は大庁だいテイ(飯の間)から、つと中庭の子供に声をかけた。子供は赤い鶏を追いかけて回っていた。  
 「あの兎の年頃だったわ、実の母さんが私を置いて家を出たのは。父さんが私を渡さなかったの

ね……。いちどは私を取り戻しにきたことがあった。あの柿の木の下からこっそり私の名を呼んで……。述伊が攫われたといまの母さんが大騒ぎしてた頃は私は遠くへ行っていたんだものね。

三カ月後にはみんな私を取り返しにきたわ。母さんは気狂いのようになっただけ……」

親子は暫く沈黙し合っていた。やがて娘がうらめしそうに言った。

「どうして母さんと別れてしまったの。男はみんな身勝手だわ。女は弱いものなのよ」

「あれは自分から出ていったのだ。何も私は……。まあ、いい。そのことはもう聞くな」

「かわいそうな母さん。なぜ一緒に暮すように努めなかったの。樺太にいても思い出して……」

いまはどこにいるの？」

「知らぬ。気が狂うてどこかにいるという話だ」

述伊は目頭を押えた。

「不吉な気がしたんだ。樺太を発つ時、いやなこともあったから。ああ、かわいそうな母さん」

「——あれのことはもう忘れなさい」

「どこにいるのか本当にわからないのね」

「もうあれから十年になるのじゃ。どこにいるやら」

述伊の視線はひたひたと中庭に注がれていた。とつぜん、老父に向って娘は切なそうに言った。

「ねえ、樺太へ行きましょう。これ以上、離れて暮すのは不幸だわ。いまの母さんを連れて行くのよ。これからは育ててくれた母さんを大切にしていあげなくては。行きましょう、あの児だつて

本当の祖母さんだと思っているんだし、置いてきた子らにも祖母さんは必要なのよ。ああ、でもかわいそうな私の母さん——」

老父は何も答えず、中庭をへだてた土壁の亀裂にいつまでも眼をなげかけていた。

何日が経って、親子は丘陵にのぼって祖先の小さな墓に詣でた。さらに旬日が過ぎたある日、

四人連れの親子は川に架かった木の橋を渡り、邑からだんだん遠ざかっていった。

祖母はその狂おしいばかりの身勢打鈴によって、いつの間にか僕を母にまつわる伝説の継承者に育てあげていたようである。もはや死者に属した祖母は口移しでもってなおこの僕に母の物語を伝えよ讃歌をうたえと命じているかのようなのだ。

じっさい、僕はあけつびろげにわが母を讃えることがあったのである。もちろん、僕のへ身勢打鈴は祖母のそのような韻を踏んでいるわけではなく、ごくありふれた語り口によるものであったが。

31 碇をうつ女  
いいおふくらだった。そういう実感があるのである。これは「ジョジョ」の偽らざる心境である。もつとも母が今も生きていて、かたわらでしきりに老いの雑言をきかせていたら、息子はそれをわずらわしがったり、時には親を邪魔者扱いするにちがいない。その程度のつれなきを息子は充分に持っているのである。だから、死者を讃えていても、生きておればどう言うか知れないあやふやな所があるのも事実である。しかし、物は見ようだ。僕は母を讃えていながら、しだい

に窮屈な気持に振りこんでいき、ああ何で悪口を飛ばせるほど長生きしてくれなかったのかな、と思うこともあるのだ。

三十三歳になった時、僕ら男兄弟はそれぞれまったく迷信深くなっていくみたいであった。最初にこの年に達した一番目は事のほか信心家の一面をさらけ出した。その昔病室で天井をにらんでいた一番目が、この年いっばい安全運転第一の真面目なドライバーであったのは自分がこの年に死ぬのではないかとこの予感におびやかされつづけたからであった。こぶしで顔をぬぐっていた二番目が漢方薬の効用をにわかには認めはじめたのもさして理由は異ならない。壁に貼りつけて息をしていた三番目もこの年を例年になく不気味な想いで過したものであった。僕らは母の年になるとなぜかそれ以上生きのびられぬような気持になっていたのである。だから無事にこの年齢が過ぎていくと、それぞれがそれを母の庇護と感じ、心からなる感謝をひそかに捧げたのであった。

生きのびてみると、僕らはあらためておどろくことがあった。へ何という若さなのだろう……三十三歳という女の一生が目がくらみそうなるほど短く感じられた。女の軀に火が燃えさかっている年である。生き甲斐が確かめられ、ひろげられていく時期である。僕らは儼然として母より余分に生きてきた自分達の年をかぞえた。少年の頃の僕にとって、母は文字通り母としてしかうつつらなかった。三十三歳の生命にかざられた人としてはいちども感じたことがなかったのである。病気がちになって町の病院に入っていた時も、その母が死ぬという不安はいささかも持たなかった。

少年は母がいつまでもかたわらに居るものだと高をくくっていたのだ。人間の死にあまりにもうかつであり過ぎたのだ。

ともあれ、僕は母を思いつく立場になった。その僕が母を語る折、つい潰えてしまうのは、それだけ母子の生活が短すぎたせいかもしれない。親をいっばしにくさしてみたくとも、ついつい淡くなっていくだけであった。

「私の子供でない——」

母は何かのときにこう言っていて僕を困らせたものである。戯れに言う時は、笑いながら（或いはかえって真面目な面差しで）こう洩らすのだ。

「ジョジョや。おまえは橋の下から拾ってきたんだよ」

場合によっては、事情がすこしばかり変わってくる時もあった。

「ほんとうはサーカス団のオジサンからあずかったのさ」

学校に入る前の僕はその言葉でよく泣いたものだった。すると母はいそいで僕に安心させようとするのである。「ジョジョや。なんで——。私の子だとも」

こんな場合はよいが、母が怒って「私の子供でない——」と言う時は本当に怖しく感じられるのだった。日頃は笑っていたが怒るとひどく厳しい人だったのだ。確か、国民学校二年生の頃である。僕は死んだってその日の恐怖を忘れることはないだろうに……。

近所の子供達と一緒に駅前の広場で遊んでいた。春か夏のはじめの季節であった。風が皮膚をくすぐるように走りぬけていた。自転車は僕らのそばで止って、大人が駅の構内に入っていた。とつぜん、僕らの鼻がひくつきはじめ、眼が鼻の方角に移動していったのだ。自転車の荷台にアパン色の箱がいくえにも積上げられていた。風はしきりにそこから匂いを運んでいた。ステは僕を意味あり気に見た、僕は同じ顔付きで隣の子を見た、隣の子はその隣の子をやっぱり同じ顔付きで見た。そのとたん組織的な窃盗団はときどきと行動を開始したのだ。一人が地べたで馬になると、馬乗りになった一人は背伸びして、箱のフタを明け、三人目はアパンを受け取ったし、四人目はたえず周囲を見張っていた。それから僕らは一気に浜辺まで走り、材木置場にもぐりこんだ。獲物を厳格な眼付きで分配し合うと、こんどは一齐に頬張り出した。最後は口を割らぬ固い約束をかかわしてすばやく四方へ散った。

暫くして家にもどると、僕は用心深く母の顔をうかがった。どうやら大丈夫のようだ。母はうつむいて繕い物をつづけている。安心して僕はそばへ寄っていった。その瞬間を待っていた母の手がぎゅっと手首を掴んだ。おどろいて顔を見ると、こわばった顔で「正直にいいなさい——」ときた。

それからの折檻が尋常でない。シラを切ったからである。母は身ぶるいをした。その根性がにくいと指に箸をはさんだ。中指の付根に箸をはさんで三本の指をしぼり上げる。その痛さったら油汗がたらたらとひたいを流れていった。悲鳴をあげるが容赦しない。とうとう僕は白状してし

まった。それでもゆるして貰えなかった。未練がましく、誰々もやつたと並べ立てたからである。その根性が浅ましいとまた指をはげしくしぼるのだ。

「いつそんな意地地ない子に育てた。おまえは私の子供じゃない。ああ、いやだ……。出ていけ。この家から出ていきなさい」

首筋を引きずって玄関から放り出そうとする。僕は柱にしがみついで「ちがう、ちがう。母ちゃんの子だ」と連呼した。母は口惜しそうに頬を光らせてにじり寄った。

「それなら、私と一緒に死んでくれ。いまからドロボーをするような子は大きくなったらどうなるか。いっそのこと、おまえを殺して私も死んでしまおうんだ」

本当に首をしめようとするのだった。僕は母の柔かい膝にしやにむに顔を埋めてわびた。母の子になる、とあらんかぎりの声をあげた。

やっとゆるされた後、母に連れられてパン屋さんに出かけたのだった。それはまったく恰好の悪いものだった。見世物のように近所の子らが僕のうしろについてきたからだ。途中でステを見かけた時、アッと僕は声をあげて母を見上げた。ステはあわてて姿をくらました。僕は未練がましく母を見上げていたが目を伏せてしまった。告げ口したかったが、また折檻されてはたまらないからだ。

日頃はやさしくても、仕置きのきびしさが僕にへ親」というものの不思議さを感じさせたので



ある。母はどうやら何かを考えている。この自分を「私の子」に育てようとしている。漠然とながらも僕はそう思った。「私の子」という言葉が、まるで注射のあの痛みのように体内をねぶって流れていくのであった。もっとも僕はその後もしばしば「私の子」らしからぬ振舞いで母を失望させたのであるが。出来の悪いこの三番目にかの女は心配ごとが絶えなかった。

かの女のきびしい態度はそのまま自分の夫にたいしても通じるものであった。日頃は夫にやさしい妻であった。睦まじそうに見えた。父もかの女を妻として満ちているようにうづるものであった。ある日、母は飼犬を玄関前から血相かえて追い払ったことがあった。いつも裏口に飼っておくそのムク犬がその日何かのことで首輪をはずし、玄関先の地面をしきりに掘っていたのである。母は大の犬好きであったが、その時ばかりはゲンとなくほど犬の腰を棒でぶったのだ。あとでわけをきくと、犬が家の前で地面を掘るとその家の主人が死ぬというのであった。それは迷信であろう。案外と母には信心深い所があり、日本の着物を着たりする「ハイカラ」な面とそれは奇妙に同居していた。それはともあれ、母が夫を大切にしていたのはこの迷信深さからもはつきりわかるのである。だが、両親はしばしばあらそった。周期的なあらそいは年とともに節がふえ、僕が国民学校三年生になっていた頃はよほどあらそう日が多くなっていたのだ。

両親の「喧嘩」はどうかすると、祖父母のことが絡んでいた。双方は言い分を持っているようであった。口論がくりかえされるほど、子供の眼にもその輪郭がはつきりとわかった。父は妻が自分の老父母にたいして孝心が厚すぎることからして不満なのであった。自分よりも親を大切にするとはいわれない文句をしばしば放った。妻への愛情は妻の父母への嫉妬となっていたが、そのせいか父はめったに「洞窟」には何候せず、祖父母も「鼻っ面も見せない」娘婿を内心では快からず思っていたのである。母はしばしば両者のあいだに立たされた。

「袴(朝鮮のスボン)なんぞ履いて——」と父は苦情を吐いた。

「でも老父(おとう)さんの気持にもなつてあげたら。それだけがほこりじゃない。せめてそれだけのことを……」

当時は白衣を着ると、憲兵がやかましかったのである。しかし祖父は樺太にやってきてからも袴を着用していた。祖母が汚れたチマ、チョゴリを驅から離さなかったように。その筋からの注意はこの「洞窟」の住人達によってしばしば無視された。それからというもの父の所に苦情がまわっていくのだ。

「あの婆さんときたら。まるでこの俺が無理に樺太へ連れてきたみたいに恨んでいる。なんで俺を白い眼で見るんだか」

「老母(おか)さんは心細いのよ。言ったでしょう、老母さんのこと……。だから……」

「お前はいつも二人の肩を持っているな。俺の立場はどうなるんだ」

父はカッとして怒鳴り、母はうらめしそうに夫を見かえすのだった。両親の口論は時たま僕には意味が通じない。とくに祖母にまつわっている部分だった。何を意味しているのか当時はさ

は意味が通じない。とくに祖母にまつわっている部分だった。何を意味しているのか当時はさ

ぱりわからず仕舞いだったのであるが。

父母のあらそいはだんだん二人の問題に進行していく。それこそ知り合った時のことから洗いざらいぶちまけながら、烈しく遣り合うことがあったのである。

「おまえは男を亡ぼす女仙だ。俺のバルチャはそれまでだったんだ、知り合ったその時にな」

「アイゴ。ほんとうに、ほんとうにそうでしたよ。なんで私は樺太くんたりまでその男と一緒にきたんだらう」

皮肉をこめて母は遣りかえず。父は激昂して畳をけつてとびかかるのだった。僕はびっくりして玄関からとび出す。急を告げに「洞窟」へ走っていくのだ。兄達は必死になって父を止めようとする。そして分銅がついたようにはね飛ばされてしまう。

嵐のあとの家の中は密林のように息ぐるしい。父はむずかしい顔で生煙草をふかして母は傷ついた獣のように部屋の隅でひたいを押えている。子供達は神経過敏な山羊のようにおどおどしている。僕はジョンと立ち上って蟷踊りをはじめたくなっていた。

僕らは女が弱い動物だと父からおしえられた。母にたいする父の乱暴は僕らがそう信じる日々  
の教室であったわけだ。もちろん、僕らは母の支持者であった。乱暴者の父をにくみ、やがて僕らの力で父を打倒する空想で僕らの頭は昂奮状態になってしまうのだった。子供達の幼い敵意が部屋の中を沈黙のいばらで埋めていくと、父は不器用に立ち上って外へ出ていってしまうのである。

そのとたん、僕は母のそばに寄り、熱烈に同情心をきそい忠誠を誓い合うのだった。僕はそれで鏡台から鬘甲の櫛を取ってきて母の手に押しつける。母の髪はすだれが切れたみたいだったから子供が何をにぎらせたのか、しばらく母は見ようとしなかった。その眼差はうつろにならなげられている。やっとなぐり固い感触に気づいた時、母の面差にふつと感情がこもってきて、かすかに微笑みながら言うのだった。「ジョジョや、おまえはほんとうに女の子に生れりゃよかったんだよ」

祖母が髪をきながら駆けつけてきて、母を見るなり大声で叫んだ。

「どいつだ、私の述伊を虐めるのは。ふんと」

母は髪を梳きながらひっそり笑って答えた。

「なんともないのよ。老母さん」

しかし、その日ばかりでなく父母の不和は日毎につのっていった。なぜ両親があらそうのか深い原因が僕にはわからなかった。自分がうけた折檻から想像してみても、母にとって父も「私の夫」ではないのであのようにきびしい態度をとるのだろうかと思ふのである。もともと、母はたとえ正しくても父には負けてしまうのだ。追いつめられると、父は苦しまぎれに乱暴を働いたから。そして母はそんな拳に出る夫を身ぶるいするほど軽蔑しているのだった。

母は「男を亡ぼす女仙」のように見えなかった。それどころか、何くれと父を気遣い、盛り立てようとしている所があった。炭鉱で知り合った時、かの女はこの青年坑夫の中にどんな性格

を見出し、希望を託したのだろうか。母は父のように流れていく人にどこかで留まって欲しいとつよく思っていたようである。流れに逆行していくことが無理だとしてもどこかで足を踏んばっている意地を父の生き方にもとめていたようであった。

「どこまで流されていくの。下関でたくさんよ。それを本州から北海道、さらに樺太へと——。当身(あな)の生き方もそれにつれて流れているのよ。何で協和会の役員なんか引き受けるの。当身(あな)が善いからそうして利用ばかりされて。みんなが会員にされたからって何も旗まで振ることはないでしょう」

「旗を振るだって。あの情い言いぐさを見てみる。先祖の言いつけでもあつて俺がそうするのか。どうせ誰かに鉢(はち)が回るのだ。仕方なくやる、それだけのことでじゃないか」

「その協和会ときたら。自分で自分の首を締めているだけでしょ。いやがる老母さんにモンベを履かせたり——。当身はすっかり変ってしまったんだわ」

祖母はその年の春からモンベ姿になっていた。戦争がだんだん不利になるにつれ、これまでお目こぼしにあずかっていた老婆の「我儘」もゆるされなくなっていたのである。「洞窟」からあらわれた祖母がとがった顔付きで防火訓練に出かけていく姿がよく見かけられた。かの女は空に群れている鴉(カラス)を見上げて、とつぜん、洞んだ梨のような乳房を揺らし驅(か)るぶるとふるわせ、こぶしを突き出すのだった。

「おお、いまに伝染病(でんせんびょう)がはやるんじや。鴉(カラス)が告げおる。この戦争もこの町もみんな亡びてしま

んじや」

父には父の苦衷(くそう)があつたようである。だが、母のするどい非難(ひなん)に傷つけられ、あかくように悪酔(あくすい)していくみたいであつた。「みんな奇(あま)つてたかつて俺(おれ)を悪者(あくもの)に仕立てている。どいつもこいつもだ」と父は怒鳴るのである。

家庭が静かに見え、母が仕事に余念のない日は僕らの最良の日だった。学校や遊びから帰ってくると僕は母のかたわらに坐りこむ。別に話しかけるでもなく話しかけられるでもなく暫くそうしていてもまたボイと外へとび出していくのだ。日によっては母の物腰(ものこし)にいちいち質問をしかけてうるさがられてとび出していくこともあつた。だが母のそばに坐っていると、不意に「何てすばらしいんだらう」と賞讃(しょうざん)がこみあげてくるのである。発作的なこの気持は自分でも説明のつかぬものであつた。母の耳の中にでも飛びこんでいきたくなるのだ。耳たぶの上に腰をかけて一寸法師(いちじゆふし)かコロポックル(コロポックル)のように母の仕事ぶりを眺めていたものだ。母はこの熱愛者の気持を知っているようでもあつたし、知らぬ振り(しらぬぶり)をしている風でもあつた。仕事の方が先であつた。洗濯物にかこまれた母は指(ゆび)につばをつけ熨斗(ぬいす)の火加減(ひかへん)を確かめる。「どいてこらんと言いながら唇(くちびる)に水をいっばい含み、霧(きり)を座蒲団(ざぼたん)の上の衣服(いふく)に吹きつけるのである。熨斗(ぬいす)のにぎりに力をこめ、ひとつひとつ丹念(たんねん)に皺(しわ)をのぼすと、ほっと息をついて柱時計(はしらどけい)を眺めたりした。熨斗(ぬいす)を用いぬ日は重ねた衣服類(いふく)に布地(ぬい)をかぶせて、砧(いす)で気長(きなが)にうつのである。毎日のように見る光景(こうけい)であつた。見飽きているはずなのに母がトントン、トントンとやっているのを眺めるのはたのしみであつた。故郷(こきやう)の

川辺で見かけた白衣の女達をぼんやりと思いつき、遠くへ惹き入れられていく気持になっていく。砧をうちながら、母は何を考えていたのだろう。ある春の日のこと、その日を僕は恐怖に晒されきった小羊の感覚でしか思い出さなかった。朝っぱらから父母は感じがおかしかった。昼になると、父は母に向かって「出ていけ」と怒鳴り出して、それが含図のように二人はげしく愛想尽かしを言い出した。しかしそんな場合も母の方は自分の言わんとすることを充分に喋る余裕をあたえられなかった。父がたちまち庄しつぶす勢いで話を奪ってしまうからだ。ついに母はあきらめる口調になって首をかすかに振るのだった。

「流れてきたのよ。故郷を出てきたときからなんだ。ヒュー。そうなのよ。望みも軀もすりへらしてさ」

「それも俺が悪いだろう。おまえはきれいな女なんだ。俺は汚い人間でな」

「そうではないわ。私もだめ、だめ、だめ。ああ、こんな生き方なんか堪えられないッ。どうして——」

母は暗い眼差でじいっと考えこむのだった。父はちょっと薄気味悪そうに母を眺めたが、すぐに嫌味を言わずにはいられない顔つきで毒づいた。

「シバラ。出て行け。お前の血筋がそうなんだろう。勝手に他の男と絡みつきゃいいんだ。ただ、子供はけっして渡さないからな」

「アイゴッ、下賤な男。そうよ、私がまちがっていたのよ。ヒュー。勇気のある男と思っていたのは、いやらしい乱暴者に過ぎなかったんだ」

僕は悲鳴をあげた。父が畳をけたからだ。……翌日、僕ははおどとして母の様子を見つめていた。父は微用の仕事に出かけて部屋の中は母と僕らだけが残っていた。大きなマスクをつけた母の青ざめた顔の中で切りこみの深い目だけが異様に光っていた。昨日のいさかいの末、妻の唇を乱暴者の夫が裂いたのだ。病院で二針も縫わなくてはならなかった。傷口をマスクでかくしたまま母は黙々と身仕度をいそいでいた。箆子を引いてトランクに身の回りを詰めこむのだった。とつぜん母はいったん詰めた日本の着物を引き出すとスタスタに引き裂いてしまい、押入れの行李から色のあせたチョゴリ、チマを取り出して入れ替えた。どこに行くのだろう。狂ったような母の動作は僕の心を完全に打ちひしんでいた。

母は僕らが完全に眼中にないみたいであった。身仕度をととのえると台所にいき、そのまま裏口から出ていこうとした。その時になって、僕はようやく自分達が捨てられるのだと感じたのだ。一斉に僕は非難と哀願のこもった声を出した。その声が母の耳にせめぎこんでいったとき、腕くも母はその場にうずくまってしまったのである。僕は数居をへだててぼんやりとうずくまっている母と向い合っていた。ふところに飛びこんでいきたいのに、近づくと拒まれそうに怖かった。じいっとしていると、母が他人のように見えてきますます心細くなるのだった。泣き出したいくらいであった。

どのくらい時間が経ったろう。母はじつに長くそこでうずくまっていた。そして小さく前こご

みになっていき顔をかくすようにして嘔りあげた。それから暫くすると、何事もなかったように立ち上り、トランクを奥の間にもどすのだった。

張述伊が死んだのはその日からおよそ十カ月経ってからである。

子供達と残された父はある日、押入れを明けて行李を引き出し、とつぜん、わっと男泣きしたことがあった。父は子供達の下着類をつぎつぎに取り出し、行李を片っ端から明けては女々しく涙をつまらせた。どの衣類もきちんと継がががってあり、いつでも着ることができるようになっていたのである。

「あれは自分が死ぬのを知っていたんだ。それで無理してこんな……」

絶句しながら父は僕らにその衣類をしめした。覚悟のできた死であったのだ。「産婦人科」の病気を長いことわずらっていた母はひそかに自分の寿命を感じていたのであろうか。

後年、僕は老いはじめた父が先妻の仏壇の前で肘枕を立てて寝そべっている姿をしばしば見かけたものである。それと知らずに部屋に入った僕はさり気なく出てきたものだ。父は低い声で仏壇にきかせるように「春香伝」や「沈清伝」などを口ずさんでいるのであった。

そんなとき、僕はあの病室での父母を想像することがあった。僕らが雪の中を駆けていた頃、二人はどのような最後の会話をかわしていたのであろう。「自分の手を握って……」と、当時、父はその時の模様をくりかえして告げたものである。母は子供のことを案じていたというのだ。

しかし、夫のことを母ははたしてどう思っていたのだろうか。僕らは長いこと、父の説明の仕方に弁解がましきを感じていたのだ。「自分の手を握って……」という言い方に父のうしろめたさすら嗅いだ気になった。それは妻にやさしく振舞えなかった男のくるしまぎれな自責の表現であったかもしれないのだ。

しかし、この頃になって僕はこうも想像してみるのである。母は夫の腕をもとめて、二人の未完成な生活が終りに近づいているのを何者かに拒もうとしていたにちがいない。夫が手に力をこめて握り返すと、かの女はかすかにうなずいて、かえって夫をばげまそうとしたのではなかったか。

「流されないで——」

父は僕らに母のことを伝える時、かの女がそのような志を持ったまま死んだ女であったことを自責をこめて語ったのである。



文春文庫

定価はカバーに表示してあります

砧をうつ女

187-1

1977年11月25日 第1刷

著者 李恢成

発行者 檜原雅春

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3 〒102

TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが、小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan